

犀言語

A カプセルの章

1

ここは、すべてが重力に支配されている。

遥か頭上の太陽から降ってきた光さえ、閉じ込められて、ここで死ぬ時を待つ。

冬の朝には、大地の湛える霞が、やがて消えていくことから分かるように、ここで死ぬ時を待つ。

夏の夜にも、鼓動を交換し合う欲動の余熱が、朝には失せて冷えてしまうことから分かるように、ここで死ぬ時を待つ。

ここでは、万物が到来し、消えていくのを待つ。

そして、僕は、胎盤からこの待合室に直行してきた。

行くあてはない、帰るあてもない。

僕は、このカプセルに閉じ込められた未熟児だ。

喃語を発しながら、保育器のカバーに投影された映画を見続ける。

赤子がガラガラと鳴る棒状のおもちゃを無心に振り続けるように、僕たちは、スマートフォンのディスプレイに表示されたSNSの画面をスクロールし続けている。

「星間爆発の中で、私は宇宙を救いに戻ってきた」※1

しかし、僕は生まれ直すことはない。

僕は二度とここで待つことはない。

到来したものはすべて消滅するからだ。

2

2019年5月14日20時14分、消毒するかのように白く明るいスーパーマーケットの調味料の棚に立った時だった。

僕は商品の値札が読めなくなっていることに気がついた。

おそらくそれは以前からだった。

ケチャップ、マヨネーズ、食用油、醤油、塩。

同じ普通名詞で呼ばれるものに対して、多すぎる商品が並べられている。

僕は、その違いがまるで分からず、ぼんやり立ちすくしてしまった。

商品のパッケージにある商品説明、売り文句、値札、成分表を見比べようと試みた。

しかし、僕は並んでいるものたちのそれぞれの違いを把握することができない。

そして、その陳列を通して、そのスーパーマーケットが僕に伝えたいことを読み取ることができない。

そこでは、シンセサイザーの安っぽい音で無害化されたNirvanaの「Lithium」が流れていた。

僕は、缶詰と調味料の棚に挟まれて立ちすくんでいた。

その後ろを、白いジャージを着た中年の女と、マスクで顔を隠したスウェットの大学生くらいの娘が、カートを押しながら通り過ぎていく。

通り過ぎた後、中年の女が娘に「なんかこの曲ちょっとかっこいいね」と言って、娘はそれを無視した。

スーパーマーケットと呼ばれるカプセルの中で、僕と、中年の女と、若い娘と、意味不明な商品は、シンセサイザーの安っぽい音で無害化された Nirvana の「Lithium」を聞いていた。

「私はとても幸福だ。なぜなら今日私は友を得たからだ。」※2

僕の体の主要な関節が震え始めた。それはそこが食物を保存するために冷却されているためだけではなく。

それは悪寒ではなく予感だったと今は思う。

3

2019年5月30日11時20分、僕は祝福のような陽光を浴びながら、近所の河原に腰かけていた。

ジーンズの前ポケットで携帯電話がずっと振動していたがやがて止まった。

会社からの電話だったと思うが、彼らに多すぎる商品の無意味に耐えられなくなったことを伝える言葉がなかったので、電話には出ることができなかったのだ。

僕はゆっくりと目を瞑った。

川を吹き抜ける風が、シャツの内側を通り抜けていくので、僕は腕や腹の周り、シャツの間に空間があるのを知り、そして自分が痩せていることを知った。

目をゆっくり開けると、手のひらが、石ころが、川が、橋が、その橋を吹き抜ける風が、風がはじまる場所である空が見えた。

手のひらは、5本の棒が突き出た物体だと知った。

石ころは、丸みを帯びた物体だと知った。

川は、遠くから流れる物体の集合だと知った。

橋は、その流れる物体の空中にかかっている物体だと知った。

その橋を吹き抜ける風は、見えないが蝕知可能な、水蒸気を奪って去る物体、の力であると知った。

そして、風がはじまる場所である空は、この見えない物体で満たされた一続きの空間であることを知った。

僕は空を呼吸した。

僕は、青い服を着た人間たちに囲まれるまで、正午が過ぎていく河原を大いに楽しんだ。

4

僕は、このカプセルに産み落とされてから、カプセルとカプセルの間を往復し、移り渡ってきた。

僕の精子と卵子を提供したものたちの、家と呼ばれるカプセルと、分化が完了した受精卵を培養する学校と呼ばれるカプセルを数千回往復してきた。

体が大きくなってからは、アパートと呼ばれるカプセルと、会社と呼ばれるカプセルの往復を続けた。

多くの人間を効率的に輸送するのに適した、電車と呼ばれる缶に詰められて。

そして、僕は、病院と呼ばれた、変わった人間を保管しておくカプセルに輸送された。

この病院にいる人間は、棺桶というカプセルに格納されるまでここに保管されることになっている。

これからはどことも往復する必要がない。

僕たちはそのカプセルを目指して、胎盤というカプセルを出てきたわけではない。

しかし、ここは最後のカプセルではない。

そして、胎盤が最初のカプセルでもない。

このカプセル、対流圏、社会、世間。

このカプセル、卵膜、睾丸、頭蓋骨。

殖やされ、棄てられ、尾部もなく頭部もない、このカプセル。

5

僕は萎んだように淡い暁に照らされた杉山を抜けて、ハイエースで病院に輸送された。

メガネをかけた白衣の、幸せそうでない白髪の男性に尋問され、絵を書かされ、何錠かのカプセルを飲まされた。

そこには主に老人が輸送され、滞留しており、いくつかは破棄され、それはスーパーマーケットの品替えのようだった。

老人たちはパンを食べたがる。

敬虔な彼らはキリストの肉を喉に詰まらせて死ぬ。

敬虔な彼らはキリストの肉を台所から盗む。そして、それを喉に詰まらせて死ぬ。

彼らの肉体は、清らかな彼らの信仰心とは違って朽ち、彼らの知能は健やかな彼らの信仰心とは違って鈍している。

だから彼らは、白衣を着た警察官たちの巡回の際を何ヶ月も待つ。

しかし、いざという時に彼らの足は疾くの忘れており、彼らの耳は気取るのには役立たず、その速すぎる信仰心に嚙下が追いつかず、キリストの肉を喉に詰まらせて死ぬ。

警察官たちは台所に荊のような錠をかけ、信徒たちを弾圧をする。

僕は、彼らと信仰を共にしなかった。

しかし、僕はそろそろこのカプセルを後にする必要があった。

また正午がやってくることを予感したからだ。

6

2019年6月21日10時15分、僕は厨房の鍵を開けた。

そして、僕は老いたものたちに「厨房の鍵が開いている」と教えて回った。

信仰者たちは、我先にと厨房に向かっていく。

警察官たちは、今、新しく輸送されたものの受け入れに回っているので、彼らの進軍を止めるものは誰もいない。

僕は病院の裏庭を抜け、フェンスを超え、杉山の中を歩き出した。

尾根の開けたところから、病院にパトカーと救急車が数台向かっているのが見えた。

昼の光が強くなってきたので、僕は切り株に座り込み、正午を待つために目を閉じた。

風が吹いて、僕は気づいた。

僕は、ただ彼らに僕の肉を与えるために、ここにやってきたのだ。

B カワゲラの章

1

朝日を浴びた川の水が、カワゲラの這う白い石を洗っている。

かつて人は虫と共に生きていた。

蚊、虻、蛆、シラミ、カマドウマ、そしてゴキブリと共に生きていた。

戦後間もない頃、九州のある離島では、大量発生したゴキブリに食料を食い尽くされ、集落が1つ全滅したそうだ。

確かに今でも私たちはゴキブリと共に生きている。

けれども、ゴキブリは最早、簡単に駆除できる。

蚊からは逃れられないけれども、それでも昔よりスマートに駆除できる。

コバエも薬剤を設置しておけば屋内には入って来ない。

もう忘れられているが、人と虫は黙々と殺し合っていた。

今は、人類の偉大なる科学技術の発展のおかげで、それほど駆除する必要がなくなった。

だから、私たちには不快なものを駆除したい気持ちだけが残った。

かつてのように殺したい気持ちのままに駆除したいけれど、人はもう地球上のあらゆる種の駆除し終えたので、あとはもう駆除する相手は人間しかいなくなってしまった。

人間は虫ではないのでそう簡単に駆除できないし、殺してはいけないというルールを破ると公式に駆除されるので守らざるを得ない。

それでも、駆除したい気持ちは残った。

ちょっと気の利いた喫茶店で、私たちには駆除のチャンスが足りないという話をしたのは、その女の子だった。

駆除したい。

誰にも構わず好き放題駆除できればなあって思う、本当にそう思うとその子は言った。

それを聞いている俺はどちらかというと自分を良い人間だと思っていた。

だから、上手くも不味くもないコーヒーを飲みながら、人間を駆除したいなんて言っちゃいけないと思った。

だけど、よく考えると、レジの外国人にブチギレしてる老人とか、アイドルのTwitterアカウントに幼児みたいな言い回しでセクハラっぽいリプをつけてるおっさんとか、デモとかやって正義のミカタの面して騒いでいるやつらとかを駆除したいってホントは思ってた。

だってあいつらは善良な俺たちの仲間を傷つけてるし、多分駆除したいってみんな思ってると思うし、あいつらはそんな俺たちをうざいと思ってるし。

その子にそう言うと、「駆除されたら負けだから、だから駆除したほうがいい、その方がいい」と、その子はアイスティーマーをストローですすりながら言った。

そして、今は大いなる科学技術の発展のおかげで、好きなように、思うがままに、気に入らない人間を駆除できるはずなのに、みんな我慢してておかしいと続けた。

俺は、黙ってうなづいた。

その子とは、一度だけ歩きながら手を繋いだことがある。

駅前にある、普段は友達とは行かないような居酒屋で、刺身をあてに日本酒を飲んだ夜だった。

その子を駅に送るときに手をつなごうというと、その子は右手をポケットから出した。

冬だった。

ちょっとの間どきどきしたけど、なんだか奇妙に思えて気まずかった。

だからもう手をつなぐこともなかったし、それ以上のこともなかった。

俺は彼氏とは一度も呼ばれなかった。

その子と会わなくなってからもう1年経つ。

2

ともかく俺は駆除したいという気持ちに気付いてしまった。

その子と会わなくなってしばらくたった蒸し暑い夜、俺は誰を駆除したいのかなと思って、使っていなかったノートにボールペンでリストアップし始めた。

初めの20人くらいは個人名が並ぶ。

中学の時に粋がって俺の家の弁当の具を馬鹿にしてきたやつとか、「馬鹿」ってみんなの前で俺の悪口を言った高校の日本史の先生とか、派遣先で粋がってマウント取ってくるやつとか、デートの約束を何度もドタキャンしやがった女とか、高卒の俺を明らかに見下してくる大学に行った実家が近所の元友達とか。

その後は「万引きやってるやつ」とか、「電車でドアの前でぼーっとスマホいじりながら立ってて人の出入りを邪魔するやつ」とか、「ライブハウスで変なノリ方してて、周りの人に肘とか当たりまくってるにも関わらず全然謝らないし、なんならそれだけ音楽に没頭している俺、ちょっとよくね？って感じのやつ」とか「男のくせにかawaii子ぶってるやつ」とか、駆除したいやつのイメージがざっくりしてしまった。

その日は40行くらい書き殴っただけで、ノートは全然埋まらなかった。

次の日は、朝10時からバイトだった。

バイトはその頃、郊外の物流センターの派遣に行っていた。

まず、ベルトコンベアから流れてくる荷物を2mくらいの高さのワゴンに仕分ける。

荷物はAmazonやZOZOの軽いものから、お中元のビールの箱なんかの重いものまで、形も大きさもばらばらだった。

ワゴンの下の方に重くて大きいもの、上や横の隙間に軽くて薄いものを、テトリスのように積んでいく。

ワゴンは配送先で分かれている。

その物流センター付近の市に送られる荷物は、さらに細かいエリアに分けてワゴンに積まれる。

違う市や県に行くものは遠くに置いてるワゴンまで荷物を運ばなくてはならない。

ベルトコンベアが止まると、ワゴンをトラックの近くまで、それぞれの場所に分けて運ぶ。

単純労働だからか、単純にきつかった。

作業が始まってしばらくすると、自分がベルトコンベアやワゴンと同じようなもののように思えてくる。

それが嫌に思う時が大半だったが、なんだかすごく気分がいい時もたまにあった。

バイトが終わって家に帰ると、頑張ってツイッターとか見ずにノートの続きを書いた。

そして、それは俺の日課になった。

駆除したいやつネタが切れると、Yahooニュースや5 c hなんかをみて、最新の駆除したいやつ情報をゲットした。

そんな感じで1ヵ月が経ち、とうとうノートは俺が駆除したいと思う人名やグループ、属性、ふるまい、立ち姿、生き方などで全て埋まった。

暇つぶしに書き始めたつもりだったが、書き終わってしまうとどうすればいいのか分からなくてちょっと困った。

俺はこんなに駆除したかったのか。

それと同時に、毎日見ていたYoutubeに上がっているアニメを全話見終わってしまったみたいで、ちょっと残念でもあった。

アパートの部屋で一人、駆除してやる、と口に出して言ってみた。

マンガみたいだなと思った。

馬鹿っぽかったが、それも逆に良かった。

ちょっとカッコいいかもしれないと思って、色んなパターンの声色で「駆除してやる」と何回も一人で呟いてみた。

俺は、もっとスッキリしてしまいたくなった。

3

一ヶ月後、住んでいたアパートを解約した。

大家は駆除リストに入っていたのでもう家賃を払う気になれなかったからだ。

家電はほとんど捨てて、服とダンボールとスマホとノートを持って橋の下で暮らそうと思った。

しかし、その朝、家の近くの川にかかっている橋の下には先客がいた。

何枚もジャンパーを羽織ったホームレスのおっさんがぼろ布にくるまっていた。

ホームレスのおっさんは駆除リストに入っている。

なぜなら臭くて汚いからだ。

俺は手始めに駆除してみようかなと思った。

ドンキホーテにいき、なるべく殺せそうなやつを選んだ。

1万円近くのアアガンを買い、橋の下に戻る。

おっさんから少し離れたところで、箱からアアガンを取り出し、説明書を読みながら銃身を組み立て、付属の弾を込めた。

橋の下に戻って歩いていたときは、組み立てたらすぐおっさんに弾を打つつもりだった。

だけど、完成したアアガンは思っていたより重く、手に馴染まなかったので、まずは練習しようと思った。

弾を無駄にせず、確実に仕留めた方がクールだし、それにバイトで貯めた金もすぐには使い切りたくなかったからだ。

5メートルほどの川幅の真ん中に立っている橋桁の、スプレーで「LIBLO」と書かれた落書きを的に決めた。

もちろんそこで落書きをする奴らも駆除のリストに載っている。

片膝を立てて座り、照準を右目で覗き込み、右手の人差し指で引き金を引く。

パチ、と右耳で音がなったかと思うとすぐ柱の方でもパチ、と弾が当たり、橋桁の土台で数回跳ねて川に落ちていった。

今度はもう少し時間をかけて狙いを定めて引き金を引き、飛び出した弾を目で追いかける。

先ほどと同じで、弾を撃った、弾が的に当たったという実感がなかった。

川の水が流れる音がチラチラと鳴っているだけだった。

弾が命中した感触を求めて、的に向かって引き続き何発か撃っていると、背中の方でいきなり物音が聞こえた。

おっさんがボロ衣を抱えて逃げていくところだった。

よろよろ歩くおっさんの後ろ姿は隙だらけだった。

なのに、俺は撃てなかった。

橋桁の落書きと同じように狙って、撃てばいいだけなのに。

俺は準備が必要だと思った。

再びドンキホーテに行き、今度は迷彩服と射撃用ゴーグルを買った。

ひとまず敷地は確保できたので、おっさんが残していったダンボールで囲いを作り屋根をかけ、そこに住むことにした。

橋の下での初めての夜、俺は恐怖で寝付けなかった。

橋を渡っていくすべての足音、すべての車の走行音、川を滑っていく風の音、石を洗う川の水の音。

音は、「お前は駆除される側だ」と俺に囁き続けた。

俺はいつだって駆除されることに気が付いた。

手足の指先も、太ももも、心臓も、口も震えていた。

寒い季節ではなかったのに。

指に自分の熱い息を吹きかけて、震えを紛らわせようとしても、コンクリート越しに絶えず振動が俺の体を揺すり続けていた。

4

気が付くともう朝になっていた。

俺は生き延びた。

駆除されずに済んだ。

川の始まりの方に見える朝日がすごくきれいだった。

ジョギングするピチピチの灰色の半袖半ズボンの小狡そうな顔のおっさんも、駆除リストには載っていたが見逃してやった。

気分が良かったからだ。

朝日を跳ね返す川の波をしばらくぼうっと眺めた後、俺はまた日が暮れるまでエアガンを撃つ練習をした。

もったいないので撃った弾をすぐに拾いに行くという運動を加えたのも、いいトレーニングになったと思う。

本当は寝ぐらの補強と食糧の補給をするはずだったのに、また夜が来てしまった。

そして、また馬鹿みたいに俺は怖くなった。

ぼろ布にくるまって震えていると寝ぐらの小屋は揺れた。

空腹だったが、もう動く気になれなくなっていた。

俺は怯えていて、無力だった。

昼間、別のカッコいい自分のイメージに自分を重ねて軍人ごっこに励んでいた自分を恥じた。

そして、その時の自分を殺したくなったが、それは自分の事なので殺すことも死ぬこともできなかった。

動かないでいれば、昨日のようにまた朝日が来ると信じて、段ボールの中で身を丸めた。

橋と風と、車のタイヤの振動に内臓がゆすられるので吐き気がする。

その吐き気のせいか、気分が落ち込んでいるせいか、俺は橋と風と車の振動の中に、小刻みな複数の振動が混じっていることにすぐには気が付かなかった。

幼児用おむつのロゴと、おむつを着けた笑顔の幼児の写真が印刷されているダンボールで蓋をしている小屋の隙間に、黄色い光が差し込んだ。

チェーンが回る音が近づいてきたと思うと、すぐにアスファルトの上でブレーキをかける音がいくつもした。

おそらく自転車の止まる音だ。

クスクスと息を詰めて笑う音が、徐々に輪郭を作り、言葉になって聞こえてくる。

出てこい、邪魔だ、臭い、消えろ、迷惑だ。

俺は、本当に怖かった。

俺が、駆除される番だ。

俺が、殺される。

心臓の音と鼓膜の中の血管の音がやけに近く聞こえ出した。

俺は頭の近くに置いてあったエアガンを取ったが、まともに握れなかった。

突然、頭上の段ボールに何かが当たって、ボコッと音がした。

カラカラカラ、とおそらく空き缶が落ちる音がある。

カラカラカラ、という音は遠くなって消えた。

またもう一個飛んできて、カラカラカラ、と鳴りながら音が遠くなっていった。

何回も何回もカラカラカラ、と缶が飛んできては遠ざかる音を聞いているうちに、俺の中の恐怖が窄んでいくのを感じた。

そして、一つの考えに至った。

こいつらも、どうしたらいいのか分からないんじゃないか。

缶を投げてみたはいいものの、次に何をやればいいのか分からないのだ。

こいつらは、昨日、ホームレスのおっさんを見逃した俺だ。

俺は知ってるぞ。

迷わず駆除すればいい。

ホームレスを襲撃するガキは、俺のリストに載っている。

声色の種類を聞いていると、おそらく4、5人だ。

シャッター音も聞こえるので、一人はスマホを持っている。

そいつの動きは鈍くなるはずだ。

狭い小屋の中でまず右膝を立てた。

カラカラカラと転がる音が小さくなり、少し間が空いて、次の缶が飛んできた。

俺は右手でエアガンのホルダーを固く握ると、同時に左手で頭の上のダンボールを払い、右ひざを突っ張らせて、缶が遠ざかっていく方向にスピンし、光源の方に正対した。

そして撃った。

それは外れた。

ガキどもが少し後ずさった隙に、俺はスマホのライトに照準を定めて、右手の人差し指にプラスチックの引き金が食い込む痛みを感じながら、何発も何発も連射した。

視界は自転車とスマホのライトに潰されていたので、俺にはしばらく右手の人差し指の痛みと、両方の鼓膜の内側でトクトクと脈が打つ音と、自分の生臭い息のにおいしか感じられなかった。

スマホのライトが揺れた。他のガキが暗がりの中で自転車に乗るのを察知したが、俺は照準をスマホのライトから外さなかった。

スマホが地面に落ちたのか、ライトが急に小さく低くなり、地面に張り付く小さな点になった。

弾が切れた。

暗闇に目が慣れると、背の低い黒いTシャツを着たガキが一人、川沿いの道のアスファルトにうずくまっているのが見えた。

両手で目を抑えながら、息を詰まらせて泣いていた。

そいつがウツウツと息を詰める音だけが聞こえた。

俺は小屋から出て、ガキの方に歩いて行った。

エアガンの銃身を持ち、グリップの部分を上にして、そのガキの頭に三回振り下ろす。

息を詰める音が止まった。

川が石を洗う音が聞こえてきた。

月の光がその波を洗っている。

ガキの頭がある地面に、黒いしみが広がっていく。

俺の右の拳の外側にも、同じものが付着していて、不快だった。

俺はそいつを小屋まで引き摺りあげ、床にあったノートとケータイをポケットに押し込み、ガキを小屋に詰め込んだ。

ガキのズボンのポケットには財布とタバコとライターがあった

ガキの財布には5千円入っていたので、金だけ抜き取り、財布をガキの体の上に放った。

ガキの目はどこも見えていなかった。

少し離れたところに飛んでいた、ダンボールの屋根を持ってきて、小屋の上に乗せた。

歩き出した俺は、ノートを開いて、「ホームレスを襲撃するガキ」を二重線で消した。

そのあと俺は、夜を明かして川の下流に向って歩き続けた。

エアガンは曲がってしまったので、川が深くなってきてたところで中州に向けて投げ捨てた。

日が昇ってきたので、行き当たった大きい橋の下に座り、ガキが持っていたタバコを吸った。

朝日を浴びた川の水が、カワゲラの這う白い石を洗っている。

おれは駆除の話をしてくれた子に会いたいと思った。

このノートのリストを全部終わらせたら、俺はその子を探し出して、そして、どうするのだろう。

その子の名前はこのリストに載っていない。

C ドブ蛇の章

1

ドブ村のドブ川にはドブ蛇がいる。

しっぽをつかんで、縄のようにしばらく振り回し、最後に頭を石の上に叩き落すと、ドブ蛇は絶命する。

そのしっぽには、緑色のどろっとした膿が溜まっている。

しっぽを5cmほどをナイフで切り取り、奥歯で噛み、膿を絞り出す。

その膿を吸り、舌の裏で転がすと、刺すような苦味と腐った魚のような生臭さが口の中に広がる。

その少し後に、ハッピーな気分になってくる。

ドブ村に住んでいる不幸な不良たちは、芒の茂るドブ川の橋の下に集まり、少しの時間だけハッピーな気分になる。

発達障害のブスも、麻雀狂いのブー太郎も、パンチパーマのやくざ崩れも、部落の汲み取り回収屋も、たちんぼも、不具も、白痴も、ドブ蛇のしっぽをしがんでいる間だけはみんなハッピーになる。

芒が囲む薄暗い橋の下を流れるドブ川の表面をゆらゆら照らす陽の光が、不幸な人間たちの顔に灰白く反射していた。

その膿を吸った夜は、必ず頭が刺すように痛くなる。

1年に何人かは、この膿で頭をやられる。

手足が痺れ、呂律が回らなくなり、ついには山の病院に連れていかれて、いなくなる。

それでも、みんなこのドブ川にやってきてドブ蛇を探し、千切ったしっぽを何人かで回すのをやめられない。

生臭いそのしっぽを吸って、ハッピーにならないとやっていられない。

示し合わせたように痩せこけた足をドブ川に突っ込み、ぼろ衣のようなシャツをヘド口でさらに汚しながら、夢をみる。

その膿は、彼らに似たような夢を見せた。

その夢は資本主義の夢だ。

夢の中で、彼らは外車を転がす。助手席に座る恋焦がれる女と共に、真夜中のハイウェイを疾走する。

夢の中で、彼らは、40階建のビルの最上階の高級レストランで、シャンパンを飲みながら都市の夜景を楽しむ。

夢の中で、彼らはタキシードまたはドレスを着て、アメリカのディスコ音楽に合わせて踊り明かす。

夢のなかで、彼らはハワイのビーチで、祝福のような太陽を浴びながらエメラルドグリーンの浅瀬を泳ぐ。

しっぽを彼らは無言で吸り、次のものへ回した。

それは彼らの中で最も饒舌なものも啞のように寡黙にさせた。

不幸な若者たちがドブ川でドブ蛇の尻尾を吸りながら白昼夢を見ている。

橋の下で無言でドブ蛇のしっぽを吸る、私たちが養った者たちの姿が、そのビジョンが、俺には見えた。

彼らは、確実に不幸だった。

2

それは昔の話だ。

これは私たちが養った大人たちのかつての話だ。

そして、ドブ蛇のことは今やもう無かったことになっている。

誰ももうドブ蛇について語ることはない。

あたかもすっかり忘れてしまったようだ。

俺が、幻覚を見ていたのではない。

俺の血が、父母から受け継いだ血が、それを俺に見せた。

それを無かったことにはできない。

昔はみんなドブ蛇を啜って夢を見るしかなかったことを忘れてるだけだ。

今はみんなドブ蛇の代わりに月給というドラッグを会社に打ってもらってハイになっているだけだ。

思い出せ、お前たちはドブ蛇を啜っていたんだ、と、俺の血は言った。

俺は、かつてあった不幸と、いまここにある不幸をよく観察した。

父は頑張った。だから、女を殴り、子を怒鳴り、親しき友から遠ざかり、誰からも愛されなくなった。

母は頑張った。だから、大きな音がする場所には行けなくなった。

妹は頑張った。だから、病んだ。切れないカッターで手首を切った。

いとこは頑張った。だけど、女を買い、女を売る罪を犯してしまった。

祖父は頑張った。だけど、晩年一人ぼっちの夜の寂寥に耐えられず、枕を涙で濡らした。

祖母は頑張った。だから、チューブにつながれ、ぼけ、処女のころに戻った。

祖母が一番正しい。

そして俺は、豊かな時代だ、個性の時代だ、君たちの時代だ、と言われ続けたこの時代に、自分の座る場所を見つけられないまま、ポロアパートとハム工場の往復、出口のない往復を続けている。

なぜ、ドブ蛇のしっぽをだれも啜らなくなったのか？

不幸な若者たちに吸い尽くされ、絶滅したのか？

ドラッグはもはやタバコ、酒、月給に取って代わられた。

しかし、私たちが産み養ったものたちに再生産された私たちが成人しているのであれば、どうしてドブ蛇たちも世代交代をしていないと言えるのだろうか？

また、このような不幸が観察されたいま、どうして俺たちはドブ蛇のしっぽを啜らずにいられるだろう？

3

人が時々涙を流すのは、昔自分たちが海にいたときのことを思い出すためだ。

俺はチェーンソーと作業服を購入する。

俺は、家の近くの川の最下流にある街から、上流の方に向かいながら、ひとつずつ、水道管を切断する。

水道管からは激流があふれる。

下流から徐々に、もともとそうだったように、ここは海に戻るだろう。

下流から海が押し寄せるだろう。

上流の薄汚い川辺の、ドブの底から、ドブ蛇の子孫が浮かび上がってくるだろう。

俺は山の上でそれらを拾い上げ、山頂に蛇の頭を打ち付け、しっぽを引きちぎるだろう。

昔の海に戻った海辺で、俺は蛇のしっぽを啜り、ハッピーになる必要がある。

なぜか。

俺は、若かりし俺を養ったものたちのように、確実に不幸だからだ。

ここは海に戻る。

また再び、母の腹のように胎水が満ちる。

母の腹の中で夢を見よう。

おしゃぶりのようにドブ蛇のしっぽをしがみ、膿を啜ろう。

みんなでまた夢を見よう。

D 星座の章

1

思えば、ずっと、私は普通の人のふりをしているんだと思います。

いや、私自身別に特別な人間ではないのです。

それなりにこだわりはあるし、周りと比べてすこし変わった趣味などがありますが、それも含めて普通です。

全部普通です。

なのに、普通の人のふりをするのが上手くなってしまいました。

普通の人なのに、普通の人のふりをしてしまいます。

普通の人は、飲み会で主にお金の話と異性の話を楽しそうにします。

私も普通なので、他の人に交じってそんな話をするようにしました。

その時は楽しい。

その時は本当に楽しいと思っている。

普通な私と、普通になるわたしの、間。

普通な私は心地よい、普通になるわたしも楽しい、でもその仮面をかぶった私とわたしには隙間がある。

その隙間には時々冷たい風が吹きつけ、裸の私を凍えさせます。

だから、楽しいことの後には、気持ちがしゃんとしてしまう。

それがつまらないので、私のことを好きだという男に抱かれてみたりしてみました。

それがつまらないので、誰も知っている人がいない街に行って、河原で焚火をするようになりました。

夕方、周りに落ちている木の枝や枯れ草を集めて燃やします。

はじめはパチパチと不安定に燃える火は、太い枝に燃え移ってくるとどっしりと落ち着きだします。

そこから大抵2時間くらいで、日が暮れた頃に帰ります。

変わり続ける火の形を見ているのは、何も考えなくて済むので心地よいです。

焚火のぬくもりに叶うものはないと思いませんか？

燃える火は、人間の暮らしを破壊するし、また、これを救う。

この焚火は、多分、なまぬるい。

私は知っている。

本当に、私が欲しいのはこの火ではありません。

目に見える建造物を燃やし尽くす業火です。

すべて燃えた後には、柱だけが残るでしょう。

わたしが今いる橋の柱、高速道路の柱だけが、祭壇のように残るでしょう。

そしてそれは遺跡として美しいはずです。

カラオケ店とか飲み屋街とか電車とかマンションとかが全部灰になったら、多分笑っちゃうと思います。

2

焚き火をする時間がなかったり、疲れているときは、昔ごっこをします。

やり方は簡単で、目に見えるものを一つずつ、無かったことにしていただけます。

高くて景色がいいところでやったほうが楽しいです。

まず、一番遠くにある高いビルをよく見る。目を閉じてそれが無い風景を想像する。次に目を開けるともう無い。

次は、その奥の橋をよく見る。目を閉じてそれが無い風景を想像する。次に目を開けるともう無い。

次は、赤い屋根の家をよくみる。目を閉じてそれが無い風景を想像する。次に目を開けるともう無い。

次は、古い自転車が3つ止まっているアパートをよく見る。目を閉じてそれが無い風景を想像する。次に目を開けるともう無い。

そうやって目に見える全部の建物を無かったことにしていきます。

最後には、視界の全部が、目に見える一番遠くまで一面むき出しの地面になります。

こうやって、私は、沢山の時間をやり過ごしています。

3

私は普通です。

しかし、この普通は、私だけのものなのでしょうか。

このように普通なのは、私だけでしょうか。

いいえ、多分。

街を隔てる川にかかった橋の上から、私は街を見渡します。

また他の私がいるでしょう。これまでも私はいたし、これから私はいるし、今も私はいる。

そのように普通な私たち。

私たちは、星座のように、一つであるのかもしれない。

私たちは、星座のように、一つでないのかもしれない。

私たちは、星座のように、見えるのかもしれない。

私たちは、星座のように、見えないのかもしれない。

それでも、私たちは、交わりあうことがあると思う。

そしていつの日か、私たちは分かり合えることがあると思う。

いつか、多分。いつか多分。いつか多分。

引用

A

1. Radiohead 「Airbag」 作詞：Ed O'Brien, Colin Greenwood, Jonny Greenwood, Thom Yorke & Philip Selway, 1997 和訳：高谷誉
2. Nirvana 「Lithium」 作詞：Kurt Cobain, 1992 和訳：高谷誉